

＋ 1 4 【ばかばかし】

この世はばかばかしいことばかり、というのは、おとなになったぼくの素直な感懐ですが、こどものころは、見るもの聞くものすべてが新鮮で、ばかばかしいどころか、世の中というものはこんなに面白いんだと感じていました。

ところが懐爺は、

「この世はばかばかしいことばかりです」

というのが口癖でしたから、いつも首をかしげていたものです。

「どうしてそんなこというんじゃ」

ぼくは何度かきいたことがあります。

「金ちゃんがおとなになったら解りますよ」

と懐爺はいうばかりでした。

あるとき、ふとおもいついてこういいました。

「そんなに、ばかばかしいばかばかしい、ばかりいうとると、ばかばかしいおばけでもでてきそうじゃ」

すると懐爺は、ぼくが想像もしていなかったことをいはじめたのです。

「わたしはあれこれ、わたし自身もこわくてたまらないおばけについて話してきましたが、【ばかばかし】というおばけほどこわくてたまらないものはないでしょう」

「やっぱり【ばかばかし】はいるんじゃな。やっぱりばかばかしいおばけかのう」

《瓢箪から駒》という言葉をもし知っていたなら、ぼくはそう感じたことでしょう。

「そうではなくて【ばかばかし】そのものは、ばかばかしくはありません。おばけの正統派（せいとうは）ですからね。【ばかばかし】は、ばかばかしいばかばかしいと、人間世界のことをばかにしてばかりいるおばけです」

「まるで、かいじいじゃのう。ちっともこわくない」

ぼくは茶化していいましたが、懐爺は真剣です。

「これからわたしのいうことは、ぜんぶ【ばかばかし】がいったことで

す。金ちゃん、よろしいですか」

「よろしい」

「おぼけの世の中にはぜんぜんないものが、人間の世の中にはいっぱいあるぞ。だから人間の世の中はばかばかしいのだぞ。たとえば学校、たとえば会社。学校でおしえることなんかみんなばかばかしいことだぞ。会社ではたらくことなんかみんなばかばかしいことだぞ。それに家族。これもばかばかしい。親子兄弟は喧嘩ばかりしているし昔から殺し合いもやる。ばかばかしさはまず家族から産まれるんだぞ。そして戦争と芸術。おぼけの世の中には戦争も芸術もないぞ。なぜなら、おぼけでいることが戦争であり、おぼけそのものが芸術だからだぞ。いちばんばかばかしいのはお金だぞ。人間はお金で自殺をしたり殺人をしたりする。戦争だってつまりはお金。こんなにばかばかしいことはないぞ。人間が必要だとおもって、作ったお金で人間が死ぬんだから。おぼけの世の中で何が幸せかというと、お金というものがないことだぞ」

それから懐翁は、【ばかばかし】の歌を歌いました。

ないないないない
おぼけにゃないぞ
ないないないない
おかねがないない
おかねがないから
おぼけはしあわせ

ばかばかし
にんげんせかいは
ばかばかし
おかねがあるから
ばかばかし
おかねがしあわせ
なしにする

ぼくは唸りました。

そのとおりだと唸りました。

母親の苦勞の一番はお金でした。

けれどもひとつ疑問がありました。

「どうして懷爺は、【ばかばかし】がこわくてたまらないんじゃ」

懷爺は、一呼吸おきました。

「わたしもどうしてこわくてたまらないか、自分でもよくわかっていないんですが、ただいえることは、おばけはふつう、おばけの身がうらめしくて、人間がうらやましい。それなのに【ばかばかし】は、おばけが幸せで人間は不幸せだと力説します。それがやほり的を射ていると信じられるので、【ばかばかし】はたまらなくこわいんです。その姿かたちや声音や物音で、又やることで、人間を震えあがらせるおばけとちがって、【ばかばかし】はその言葉で、つまりはその思想で、人間を震えあがらせるから、たまらなくこわいんです」

なるほど、とおもわれました。

ふつうのおばけは、こどもにとってとてもこわく、おとなにとってすこしこわい。

でも【ばかばかし】は、こどもにとってあまりこわくはなく、おとなにとってとてもこわい。

そういうことなんだろうとおもって、懷爺にそういうことを伝えました。

「はい。【ばかばかし】のたまらないこわさは、学校や会社や家族や戦争や芸術で、何よりもお金で、ひどく苦勞したひとにしかわからないのかもしれません」

きっと【ばかばかし】は、懷爺の分身（ぶんしん）なんだろうともおもわれました。

忍者（にんじゃ）が使う、あの分身の術です。

なぜってぼくは、【ばかばかし】のその姿を見たことがないし、直接その歌を聴いたことがないんですから。

でもそのことは何だか、最後までいえずにいました。